創　刊　の　辭

私は今茲に雜誌『地球物理』の創刊を見，眞に重い肩の荷が下りた氣がしてやれやれと一息つく所である。

回顧すれば，吾々同人の間に此の種の地球物理研究雜誌を關西で發行したい議が起つたのは，既に八年も前であつたが，當時は未だ其の機が熟せなかつたと見え，不幸にして立消えとなつて仕舞つた。然し其の後我教室附屬の各研究所では年々觀測研究の結果が溜つて來るが，大學紀要費ではとても出せない。又一方我が地球物理教室の卒業生も次第に殖えて今では六十名にも達し，方々で研究の出來て居る人も可なりにあつて，其等に發表の機會を供する上からいつても，何とか一つ雜誌の創刊を企てねばならぬ事情にあつた。とはいへ，何分賣れそうにもない此の種の雜誌刊行には經費の工夫が第一の附き物で，そのためついつい今日まで素志を遂ぐることを得ずに居た。

然し，最早や躊躇の時期ではなくなつた。といふのは，盡きぬ悲しみにも教室の志田教授が停年退職と共に間もなく逝去せられ，其の創立になつた別府研究所は既に滿十年を超えて居る。記念の爲にも追悼のためにも，在世中博士の指導になつた成果は我々が是が非でも印刷公表すべき責任を痛感する。既に別府研究所報告を企畫する以上，一歩を進めて今こそ吾人平素の素懷を貫徹する好機とし，同人一同種々奔走努力を重ねて，遂に今日本誌の創刊を實現するに至つた。涙の出る程嬉しい。

次に誌名であるが，敢て『地球物理』と題した。"地球物理"なる語は特に志田博士と因緣ある樣に思はれる。博士が第一高等學校教授時代，時の京大總長菊池大麓男爵の招聘に應じ，京都大學へ赴任の目的が最初から既に"地球物理學"研究にあつたことは，卷頭に掲げた男爵より博士への書簡で明白である。博士の素志を繼ぎ博士を追憶する本誌の題名としては，これより適切

な名はないと考へられる。

本誌の內容は，其の創刊を決意せしめた動機から豫想せらるゝ通り，最初五六冊は止むを得ず全部を別府地球物理學研究所の十年報告に充て，次で阿蘇研究所の報告に移る積りである。然しそれが終れば我々教室員一同の一般研究と，他からの地球物理的論文の投稿を歡迎する。編輯と經營とは及ばずながら我京都帝國大學地球物理學教室員之に當るけれども，我々教室の私的機關とする意志は無い。冀くは大方の同學同好の士の援助を得て，些少なりとも地球物理學界に貢獻せんことを祈つて止まない。

昭和十二年二月十一日紀元の佳節

京都帝國大學地球物理學教室にて

野　滿　隆　治